

背 中

澤 田 悟

隆行が北陸にある実家についたのは、明け方だった。北アルプスの険しい山なみから、朝日が姿を見せはじめていた。夜通し走った疲れが身体中に凝っていた。

家のまわりに植わった杉の梢に日差しがあたりはじめ、ゆつくりと大屋根の瓦を染め、やがて隆行の乗った車を照らすころにはすっかり空があげていた。隆行は無人の家の前でどうした物かと考え込んでいた。

妻の定子と怒りにまかせて言い合いになり、そのまま出てきたのだが、数百キロを走りとおすことになろうとは我ながら意外だったからだ。

俊行の実家は二年前に母が亡くなったから、無人のままである。兄弟のい

ない隆行は父と母の葬儀を終えてから帰る機会は少なくなったものの、時々は空気を入れ替えに来ていた。

今年の三月で六十になり長年勤めた会社を定年退職してからは、初めての帰省だった。時間があっていつでもいけると思ふとかえって行けない物らしい。

築七十年近い家はくたびれ、住む人がいなくなつてからその荒み方はさらに進んだ。

取り壊すにも、まとまった金が必要だ。生まれ育つた家を自分の手で取り壊すのも抵抗があつた。それがいまだに実家をそのままにしている理由だった。

定年退職をむかえ、実家に移り住む

ことも考えたが、妻の定子は反対だった。

「あんな田舎、わたしは行くのは嫌。行くなら一人でいって」

定子は北陸の寒く湿つた気候を嫌っていたから予想はついた。隆行だって一人では住みたくない。炊事や洗濯に追われるなどゴメンだ。ドカ雪の降る冬の季節はとくにづらい。

隆行は誰かに身の周りの世話をしてもらわないと生きていけない男だった。定子の一言で移住はなくなった。

隆行は無趣味である。外に呑みに行くでもなく、パチンコもしない。ゴルフも嫌いだ。人混みのなかにいるとすぐに疲れてしまう。

釣りには時々出かけることがあつたが、魚の始末を自分ですることになつたら急に億劫になつた。それに毎日行きたいわけでもない。港の岸壁で日がな一日釣竿を垂らしている老人たちの

仲間入りはしたくなかった。

離れた釣り場に出かけて行き、日常とは異なる時間に身をおいてこそ楽しかったのだ。それも誰かに誘ってもらつてはじめて行く気になる。隆行はそんな性格だった。

庭木をいじるのも気が進まず、図書館にいつてみれば同じように暇をもてあましている年寄りたちが目について嫌になった。それに毎日、本ばかり読んでいても飽きがるものだ。テレビも同様である。何がおかしいものかと毒づいて消してしまふ。

同じ公園を何度も散歩し、読みかけの本もすぐに飽き、あげく昼過ぎから酒になった。

酒が入ると気が大きくなる。隆行もそうである。気が大きくなつて、そのあと人の悪口になるのは人柄が卑しいからだろうか。パートに出ている定子のこと悪く言う。それも

本人に言うのだから始末におえない。酔つての放言が重なり、定子にも一人息子の徹にも嫌われてしまつた。

今日もそうだ。定子はパートが休みで家にいた。何かと隆行に小言を言う。それが隆行には気に入らない。向こうは公然と日が高いうちから酒を口にする旦那がもつと気に入らないのだから。

一言二言が高じて、言い合いがおこりエスカレートして出て行けたの、出ていくだのになる。

ムシヤクムシヤして車に乗つたのは隆行である。定子は始めから出ていこうなどとは思つてもいない。いつの間にかしつかりと根を下ろしている。

言い争いになった夕刻には昼酒の酔いは醒めており、適当に着替えなどバックに積みこんで家を出たものの、行き先が思いつかなかつた。

隆行が自然に向かつたのは生まれ

育つた田舎だった。

「他に行くところもないか」

開けていく空を見上げて自嘲した。北陸の朝は六月なのにいくぶん冷えた。薄着のまま出かけてきた隆行は細かく身体を震わせていた。

隆行はしばらく実家に腰を据える氣になつた。毎日昼酒に走り、帰つてきた定子達と言ひ争いになる生活に、そんな自分に嫌気がさしていた。

それではまるで仕事しか出来ない男のようではないか。内心そうであることを認めながら、目をそらせたかつた。「なんとかしないとな」

まだ六十になつたばかりなのだ。このままではすぐに老け込んでしまふ。隆行は大手の自動車会社に勤めてきた。といつても、しょせんは工員である。

現場で自動車の部品を作つてきたに

すぎない。そして会社のなかの付き合い
いしか知らずに四十年も過ぎた。

なまじ大手の会社だったから、いけ
なかった。人数が多い分、仲間内だけ
でも充分やっつけていける。それだけ外の
世界と触れる機会が減った。住んでい
た住宅も、ほとんど同じ会社の社員で
占めているような団地だった。

仕事はきつかった。最後はアルミ鋳
造の現場に身をおいた。夏は気温が
四十度以上になった。汗がとめどなく
流れ落ちた。

隆行の会社には誰が言い出したか知
らないが、定説のようなものがあった。
隆行の会社の社員の寿命がひどく短
いというのだ。噂では、六十三とも五
ともいう。

「それでは、定年後すぐに死んでし
まうじゃないか」

「組合のデータではそうなっている
らしい」

したり顔で、ある同僚はそう言った。
非公式のデータらしい。聞かされる
とそう思えて来るから不思議だ。

自分もすることがなく、昼から酒な
ど呑んでいたら、本当に何年もしない
うちに何処か悪くして死んでしまうか
もしれない。そう思えて来る。

身体に良くない環境の中で何十年も
仕事を続けてきたのだ。悪い物が身体
のなかにたまっているような気分にな
った。

それがまた、隆行の気持ちを荒ませ
た。
退職して数ヶ月もしないのにこれ
だ。

旅行に行くことも考えたが、定子は
付き合うとは言わない。子供も大きく
なり、自分の付き合いや友達があった
口うるさい、手ばかりかかる旦那など
と一緒に旅行など行きたがらないわけ
だ。

さいわい、大手だけあって退職金は
それなりに出たから、ブラブラしてい
てすぐに困るようなことはなかった。
贅沢をしなければだ。

隆行はそれまで贅沢などした覚えが
なかった。自動車会社に勤めながら、
新車をなかなか買えずに、一台を古び
るまで長々乗ってきた。今乗っている
車は、生涯最後の車と位置付けて、定
子を説得して買った。それも社員割引
だ。

この車が古びる頃までおれはこの世
にいるだろうかと考えてみる。そんな
ことばかり考えているから、気が滅入
る。

隆行は田舎に戻った今、定年後の生
活を一度リセットしてみようと考え
た。

何ヶ月も空気が入れ替わっていない
家のなかには、熟柿のような匂いがした。

汲み取りの便所の匂いも混じっている。

隆行は急いで家中の窓を開けてまわった。

田舎の家だから、近所とはかなり離れている。おまけに敷地の周囲には防風用の杉の木がグルッと植わっていた。冬になれば強い雪交じりの風が吹く土地なのだ。

車が一台とまっけていても、しばらく周囲の隣人達は気付かないだろう。しばらく住むことになったなら、いずれ挨拶に出向かなければなるまいが、それは先のことだ。

隆行は冷えた新鮮な空気が家中に入ってきたのを確かめてから、仏間に赴いた。

信仰が厚いわけではない。むしろ神仏は信じないほうだ。しかし父母を亡くしてから、仏壇だけは帰省のたびにまいるようになった。

仏壇の引き出しからロウソクと線香を探して火を灯した。線香は湿ってなかなか火が付かなかった。

ゆっくりと線香の煙が昇っていくのを目で追いながら、今日するべきことを考えていた。

一人だとすべて自分ですることになるから、ノンビリと昼酒などしている暇がない。

むしろそれで良いのだと思った。

「まずは電気の連絡をしないと」

無住になつてから、止めてある。帰ったときだけ連絡をして、つなげてもらう。その連絡にはまだすこし時間が必要だ。

隆行の家には水道というものがなかった。いまだき珍しい湧水をひいてある。一年中、枯れもせず流れ続けている。部落で管理しており、管理費がかかる。

けれど、それでいいと思っている。

夏冷たく、冬温かい名水である。子供の頃から、湧水に慣れていたから、いまだに水道水のカルキ臭は苦手だった。

「山に降った雨がしみこんで、地下を流れてくるんだ。あの奥山からこまで七年掛かって湧いて出てくるんだ」
亡くなった父がそう言っていた。父によると何処かの大学の先生が調べたらしい。このあたりは高い山並みに囲まれた地形である。

三千メートルを少し欠けるような北アルプスの高峰から家まで地下を流れてきているとは思えないが、その澄み切った水の微かに甘みを帯びた味はそうかなと思わせる物だった。

父はこの土地の生まれではなかった。

大阪で生まれて育ったと聞いている。今でも何人か、叔父や叔母が大阪

に住んでいる。

年賀状ぐらいで、行き来はしていないが。

父は四代続いた大工の棟梁だった。大工であることに誇りを持って生きて、死んだ。

八十八だった。最後の数年は呆けて隆行のことも判っていたか、怪しかった。

その父が先年亡くなった母となかよく並んで、遺影の写真の中から隆行を見おろしていた。隆行の家のほうには、仏壇をおくような部屋がなかった。仕方なく仏壇は実家においたままになっている。墓もそうだ。

父の代に建てた墓を運ぶことも出来ず、そのままだ。

定子は隆行の知らぬまに自分用の墓地を購入していた。

「あなたの田舎のお墓には入りたくないの」

隆行はどうなのか。死んだあとのことまで正直、今は考えていない。

父は祖父とともに関西で大工をしてきたが、戦争に取られ、満州から帰ってくる、大阪の家は空襲で焼かれ、親戚の家にいつまでも厄介になってもおれず、祖父の故郷に帰ってきたのだ。そうだ。

それが今の家だ。
長男だった父は、近在の農家の娘を嫁にもらい、生涯を北陸の田舎で、大工として過ごした。父の両親と兄弟達は、次々に大阪に戻り、やがて父だけが残った。

父も大阪に帰ってきたらしい。直接は聞かなかったが、定子が父がそう言うのを聞いたらしい。

言われてみれば、隆行が小学校にはいる前に大阪に行ったことがあった。母と二人、手製の洋服を着させられ

て、その頃まだ走っていた蒸気機関車に乗って、一日がかりで大阪に行った覚えがある。

東大寺や京都の三十三間堂。清水寺に宝塚までまわった。

あのときに、おそらく父は母に大阪を見せ、移り住む相談をしたのではないか。そしてそれは不調に終わったのだろう。

母という人が大阪などという、何があるかわからないような大きな街に住もうなどとは考えるわけがないのだ。それは母の子供であった隆行には自明なのだが、父にはそうではなかったのだろう。

数十年の年月を経て、父の無念さが伝わってくるような気がした。

彼はこのような田舎に埋もれたくはなかったのだ。にもかかわらず田舎で生きた父の気持ちがどのようなものだったか、隆行にはよくはわからない

かった。

そのせいだろうか、父は早くに仕事から身をひいた。隆行よりもよほど若かったのではないか。

その頃の定年が五十五であつたから、その年には父は仕事を辞めていたように思う。体を悪くしたわけではなかつた。そのあとの人生を父は自由気ままに過ごした。

生活にゆとりがあつたわけではない。母が隣町の工場に勤めにでて生活を支えた。それを知りながら父はブラブラしていた。

それは、母へのある種、意趣返しのような物だつたのだらうか。二人が亡くなつてしまつた今、確かめようもないわけなのだが。

仏壇の前に座りながら隆行は、そんなことを考えていた。

六月だというのに、ときおり肌寒い

くらいの風が入ってくる。

山の頂にはたつぷりと白い雪が残つていた。ここは北の国なのだ。改めてそう思った。

勤め先のあつた、太平洋側の街に移り住んだときは、いつまでたつても雪も降らず、寒くもならない気候に戸惑つた物だ。

生まれ故郷では、鉛色の厚い雲におわれ、バラバラと音立てて霰が降つてくると冬のはじまりなのだ。わかりやすかつた。過ごしやすくはなかつたが。

三十年以上を過ごした地では、肌を指すからつ風が吹くだけだ。

「あれは冬ではない」
そう言つては定子に馬鹿にされた。

「雪の降るあなたのところだけが冬ではないでしょう」

頭が固いという。そうかもしれない。それで何が悪いという気分でもある。

定年をむかえて、にわかには故郷が恋しい気分になつた。

言い合ひのすえに、帰つてきたのもそういつた気持ちの底にあるからだろう。

疲れを感じて、座布団を一枚頭にあって、ごろりと横になつた。

「先祖さまが揃つて呆れて見ているかもしれない。なに、かまわない。今はただ眠い。」

隆行は二時間あまり、泥のように眠つた。定年後初めての深い眠りだったかもしれない。

隆行は夢を見ていた。

夢の中の隆行は幾つだらうか。小学校に入りたてくらいか。誰かと手をつないで、建物に入つて行くところだつた。隆行は目線を上に上げた。

父だつた。若い頃の父だつた。実際には人よりも小柄だつた父が、幼い隆

行の目線からはとても大きく思えた。父の手を握りしめてみた。ゴツゴツした職人の指先が、握り返してきた。

石造りのいかめしい門をくぐりぬけた。入り口で父は券を買い求めた。

隆行はその傍らで待っていた。あたりを見回すと見覚えのある建物だった。それは懐かしい場所だった。

水族館だ。子供の頃、よく連れて行ってもらった、水族館だった。

夏になると毎年訪れた。今は壊されて新しくなっているが、蜃気楼で有名な町の海岸沿いに建っていた古い建物だった。

その水族館には越冬施設が無く、冬季には毎年閉館になった。楽しませてくれたあの魚達は、冬場はどこでどうやって暮らしているのだろうか。子供心に心配になったものだ。一部を新潟

の水族館に預け、残りは海に放すのだと後に聞いたが。

父に手を引かれてその懐かしい水族館に今、足を踏み入れようとしていた。

門をくぐって先ずあらわれるのが丸い石作りの水槽だ。屋根があつて日陰になつた水槽の中ではエイやサメや大型の回遊魚達が途切れることなく、グルグルと泳いでいた。

海亀もいて、水槽のカーブにあわせて体をかたむけて泳ぐせいだろうか、時折亀の手足や、エイの鰭が水槽の外に出ることがあつた。

それを知っている隆行は、その機会を逃さないように息を潜めてじっと待っていた。

水しぶきをあげて鰭や手が水中から現れたときに、素早く手を差し伸べて鰭や手に触るのだ。飽きずにいつまでも待っているから、閉口して母はつれてくるのを嫌がった。

父はどうしてだろう、飽きずに待っている隆行をニコニコと微笑んで見ていくれた。

隆行はおずおずと水槽に近づいていった。ピチャッと水しぶきが飛び、冷たい海水の磯臭い香りが身体にしみた。

目の前を鱗の生え揃つた海亀の手が通り過ぎてゆくところだ。あわてて手を伸ばした。硬い鱗の感触が指を弾いていった。

笑顔を浮かべて傍らに立つ父を見上げた。父はもういいだろうと言いたげに微笑みを浮かべ、隆行の手を引いて建物の入り口へ歩いていく。

三段ほどの階段を昇りアーチ型の入り口をくぐる。なかは薄暗く水槽の照明だけが浮き上がって見えた。

父の手を振りほどき、水槽に駆け寄った。分厚いガラス板がゴムのパッキンに枠取られて、露を浮かべていた。

水圧のせいか常にパツキンからは水が染み出し、雫となつて床に滴り落ちている。水槽のガラスはいつもなかば曇つていた。その曇りを指先で擦つて顔を近づけた。

そこは異世界だつた。

重力の制約を受けないかのように、ヒラリ、ヒラリと身をくねらせ、駆け上がり舞い降り自由に泳いでいる多くの魚たちの姿に隆行は魅入られた。

顔をじつとくつつけて長い時間、水中を見詰めていると、自分と魚たちとの境目が、次第にあやふやになつていく。

自分までが魚になつてしまつたかのような錯覚に捕らわれた。それが心地よかつた。さして多くも無い水槽の一つ一つを、丁寧に顔を近づけて眺めていく。

表示された魚たちの名前も楽しませてくれた。メバルやカワハギにミノカ

サゴ。ときどき鮮やかな鰭を広げてみせるホウボウ。マダイにフエダイ。いくら眺めていても飽きない。

ときおり、ピチャンと水滴の落ちる音がひびく通路を通り、次第に小型になる水槽を惜しむように覗き込みながら進んだ。

通路はいつしか潮と砂に侵食された色あせた板敷きに変り、水槽は姿を消し、色褪せた標本ばかりの展示室になつた。

大きな足を振り上げているタラバガ二は、いつたい何十年前に海の底にいたのか分からないほどに色褪せ、甲羅の隙間から詰め物の綿をはみ出させていた。

水族館の建物は唐突に終わり、裏手を走る道路を高架で跨いで、日本海の海岸へとつながっていた。

隆行は砂利と荒い石ばかりが並んでいる海岸線を苦勞して父についていっ

た。

夏の日本海は穏やかだつた。深い藍色をたたえて、じつと眠っているかのように静かだ。

父は海岸線に並べられた何台かのボートに歩み寄つて手招きしている。あれに乗るのだろうか。

波打ちの木製のボートに抱いて乗せてもらつた。父がオールを握っている。後ろから青年に押ししてもらい、船体は、小さな波を切り分けて海原に乗り出した。

そのとき、父がボートをうまく漕げるのだろうか、隆行は不安にかられた。

岸を離れると父は、オールを漕ぐ手をとめて辺りを見回していた。まるで重大な判断が必要な航海に出かける船乗りのように。

何度も首をまわして位置を確かめたあと、決心したかのように父は漕ぎ出

しはじめた。

緊張のあまり楽しむことなど忘れ、父の手元を見つめていた。浜からはまるで凧いでいるように見えていたのに、実際に沖に出てみると風が吹き、結構な波があった。

ボートは波にあおられ、父の操るオールは空を切つて水面を引つ掻くだけのこともあった。やがてボートは眼に見えない力に引き寄せられるように、海岸線に見えている岩場に近づいて行った。

その大きな岩には沢山の人が取り付いていた。手に長い竿を持っているところを見ると釣り人であるらしい。

隆行はそつちには行かないほうがいいのではないかと懸念した。すでに釣り人たちはボートのほうを向いて、何やら叫んでいるではないか。

それは来るな、近づくな、魚が逃げるといふ抗議や悪罵だった。どうして

父はわざと近づいていくのだろうかと不安になった。

父の様子をみるとさらに不安が増した。

なれないオールを必死にあやつり、岸から岩場から逃れよう、離れようとしていた。

その努力にもかかわらず、ボートは次第に岩場に引き寄せられていくのだ。今では釣り人たちの表情までがハッキリと見えた。

隆行の不安は限界まで高まった。

ボートはこのまま吸い寄せられて、あの岩場にぶつかつて粉々に碎けるのだと思えた。父は汗を流し、オールを漕ぎ続け、それなのにボートは少しずつ岩場に近づいていった。

もうだめだと観念したときだった。

ボートは急に見えない力に押し出されるように、岸から岩から離れた。岩と岩の間は小さな河口になってお

り、その細く見える水の流れが父の漕ぐボートに味方してくれたのだった。釣り人の声は次第に遠のき、穏やかな水面をボートは漂つていった。

いったい父はどこへ行くつもりなのだろう。不審になり聞いてみようと思ふをあげると、オールがユラユラと水面に遊んでいるだけでいつの間にか父は姿を消しているのだった。

辺りを見回しても父の姿は狭いボートの中はもちろん、海の上にも見当たらなかった。行つてしまったのだと思つた。恐らくは手の届かない処へと。隆行はユラユラと揺れだした小さなボートに身を任せて一人漂つていた。岸辺が遠くに見えた。

目が覚めると、実家に帰つてきて仏間で眠つてしまったことを思い出すまでに時間がかった。

まるで夢の中の幼い頃から、一気に

現在の六十歳までを旅してきたように
疲れていた。

夢の中で体験したことはおぼろげな
がら、記憶に残っている、幼い頃に実
際にあったことのようなのだ。実際
は父が隆行をおいて、ボートの上から
姿を消すようなことはなかったわけ
のだが。

喉がひどく渴いていた。体のあちこ
ちも痛んだ。しぶしぶ起き上がり、台
所へ水を呑みにいった。

台所は薄暗く、常に流れている水の
かすかな音だけが低く響いていた。
タイル張りの水盤に手をかけて水を
くんだ。深い水盤の底に砂が溜まりか
けていた。

昔、まだ小さかったころ、朝起きて
水の底を覗き込むと、小さな赤みを帯
びた沢蟹が一匹迷い込んでいたことが
あった。

送水の細い管を伝ってどこから
やってきたのか、子供心に不思議だっ
た。同じようにのぞいてももちろん
何もいなかったが。

「さて、片付けるか」

自分をはげますように声を出した。
それから二時間あまり、隆行は台所
と居間、それに仏間の掃除をしてま
わった。バケツに水を汲み、雑巾代わ
りのタオルを絞ってふいてまわった。
数ヶ月の間に積もってちりや埃でタオ
ルはあつという間に黒く汚れた。

電力会社に連絡も入れた。

布団も一組、外に運び出して日に干
した。

「今日は晴れていてよかった」

隆行は晴れ渡った空を見上げた。押
入れに入ったきりの布団は湿つて重
かった。とてもそれで眠りたいとは思
えないほどに。

「あれ、いらっしやい。いつ帰って

こられたが？」

声をかけられて振り向くと、道端に
老婆が一人、手押し車にもたれるよう
にして、こちらを見ていた。見覚えの
ある顔だった。顔中皺だらけにして
笑っている。

「今朝ついたところです。ご無沙汰
しています」

話しながら、斜め向かいの家のおば
あさんだったと思ひ出した。苗字まで
は、憶えていないが。昔から父や母は
屋号で呼んでいたのだった。

「一度うちに遊びにいらっしやい」

何度もお辞儀をしながら、手押し車
にもたれるようにして歩いていくのを
見送った。

「元氣やったがが」

背後からふいに親しげな声がかかっ
た。

あわてて振り返ると軽トラックが家
の前に止まり、その窓から日に焼けた

顔がのぞいていた。同じ集落に住む元同級生だった。

「帰ってきたんか」

「しばらくこっちにしようかと思つて」

「そいつはいい。そんならうちで新聞取つてくれんかい」

相手が新聞販売店を営んでいることを思い出した。

「一月もおらんかもしれんぞ」

「いい、いい。そんならすぐに今日の分届けっちゃ」

そのうち一杯やろう。そんなことを言いながら新聞屋の同級生は車から降りもしないで走り去つた。

さて、あいつの名前はなんだつたらうと思ひながら隆行は家に戻つた。外に出ていると次々、声を掛けられるような気がした。

玄関の上がりがまちに腰を下ろし、土間の横に作り付けになった父が使つ

ていた大工道具用の押入れをなにげなく開けてみた。

何年も使つていない埃と、古い木屑

の匂いがした。懐かしい匂いだつた。父が元氣だつた頃はいつも木屑の匂いがしていた。

押入れには父の道具が、半ば錆つ

て雑多に押し込んであつた。鉋や鑿に鋸、どれも亡くなった父の手触りを残しているかのようだつた。

隆行が父の仕事を直接見る機会は少

なかつた。祖父ともども腕のいい大工だつたといわれても、大工を継ぐことのなかつた隆行には分からなかつた。

父は彼に仕事を教え込もうとはしなかつた。それは何故なのだろうと後になつて思うことがあつた。

父が何かを作っているところを初めてみたのは小学生に入る前だつたらうか。

保育園から帰つてくると、珍しく父が、家の土間で何かを作っているところだつた。

隆行はそばで父の手元をじつと見ていた。父は細長い木の箱を作ろうとしていた。長方形の木箱はそれまでにみたことも無い大きさだつた。

隆行はその箱は何なのかと父にたずねた。

父はしばらくためらつたあとに、死んだ人を入れる箱だと教えてくれた。

幼い隆行にはそれがわからなかつた。不思議そうな顔をしている隆行に、人は無くなると火葬といつて焼かれて骨になるのだ。そのときに入れるのがこの箱なのだと教えてくれた。

何故父がそれを作っているのかと隆行は不思議に思つた。父は家を作る大工ではないかと。

父は手を休めずにボソリと教えてくれた。部落の同じ組で人が亡くなつた

から大工である父に頼んできたのだと。

その頃はまだ部落の外れに火葬場があり葬式の後で遺骸を担いで運び、部落で火葬にしていた。

やがて一個の棺が出来上がった。それで終わるのかと思っていると、父はさらに板を切りはじめた。

次に父が作ったのはとても小さな箱だった。幼い子供だった隆行すら入れない大きさだった。それはどうするのだと、何も分からずに父にまたたずねた。

父のそばにいられるのが嬉しかった。尋ねたことに父が答えてくれるだけで、有頂天になりそうだった。父は隆行にとってとても怖い人だった。

父はしばらくためらった後に、これは赤ん坊を入れる棺桶だと教えてくれた。

夕べ、赤ん坊が生まれるときに間違

いがあって、母親と赤ん坊が共に亡くなったのだと。

それは蜜柑箱のような小さな棺だった。隆行は目をそらす事が出来ずに、じつとその小さな棺桶を見ていた。

しかしそのときの隆行は父がいつか亡くなる日が来るなどは考えてもいなかった。

父の晩年、周囲にも言われて隆行はへやを増築し、父と母を呼び寄せる気になった。けれど一度は頷いた父が直前になって首を横に振った。

「お前たちに迷惑を掛けたくないから」

遠くはなれたところで、老人の二人暮らしがすでに迷惑なのだ、隆行は言えなかった。

父が入院して危篤になりまた持ち直しと、隆行は何度も家と実家を往復した。

だから本当に父が息を引き取ったと

きには定子ともども疲れ果てていた。その父が遺影になって紅葉に囲まれて笑っていた。

亡くなったのが十月だから紅葉で、春なら桜をバックに散らすのが流行りなのだそう。隆行はいまだに馴染めないのだが。

母も亡くなった後、他に兄弟もいない隆行としては急いで家を取り壊す必要もないかわりに、誰かに住んでもらうわけにもいかなかった。

出来ることは、時々、様子を見に来るくらい的事だ。朽ちて行くのを確かめ、少しずつ生まれ故郷を失っていくような気分浸っていた。同級生を除けば、集落に親しい人も少なくなった。これからどうするか考えてしまう。古びた実家も、定年を迎えた自分自身も。

一通りの片付けや掃除を終えると、隆行は買出しに出かけた。

定子が見ていたなら、驚くほどの腰の軽さだろう。家でゴロゴロしているときとは別人のようだった。

行き先は決まっている。

小さな町である。スーパーや酒屋などが入ったショッピングセンターはひとつしかない。

平日の午前中なのにショッピングセンターの駐車場は結構な数の車が止まっていた。そのほとんどに紅葉マークが貼られていた。

過疎と高齢化の進んだ町なのだ。建物のなかに入っても、買い物そつちのけで話し込んでいる老婆たちの姿をよくみかけた。それも売り場や通路の真ん中で、こちらがやってきても避けもせず堂々と。隆行のほうが遠慮して通してもらった始末だった。

品物は安かった。特に魚介類や惣菜の類いが明らかに安く感じた。日本海に面した土地柄だろうか。普段はあま

り口にしない刺身なども買い込んだ。基本的に田舎の味が口に合うのだろうか。

知り合いでも日本海側の出身で、

「こっちの魚は口に合わない。やっぱり日本海で取れた魚でない」と

などと公言して憚らない輩がたぐさにいる。

隆行はそれほどでもないが、やはり帰ってくる刺身は買い求めてしまう。数日続くと飽きてしまうのだが。

そして日本酒も地の物を買った。友達のところへ尋ねるならばそれが必要だった。

ブラブラと買い物を終えて帰ってくると玄関に新聞が投げ込んであった。

少し早いが地元の新聞を読みながら昼飯にした。買ってきたビール缶を開ける。

少しだけにしておこうと思った。家にいるときとそこが違うところだ。家

ならば酔いつぶれても、定子が文句を言いながら世話を焼いてくれる。

「やっぱり俺は甘えていたか」

独り言が出た。

携帯を開いてみたが、着信もなかった。定子はまだ怒っているのか、それとも隆行がいなくても平気なのか。

「いないほうが、静かでもいいわ」

そんな声が聞こえてきそうに思えて、パチンと携帯を閉じると傍らに放り出した。

惣菜を摘まみ、新聞の地方欄に目をやる。地方の企業もやはり大変らしい。いろんな取り組みで生き残りを図っているのが目に付いた。

一早くリタイアして安心なような物足りないような気分、気付いたら自分の年でも雇ってもらえそうな勤め先を探していた。

「おい、おい、まだ働きかか？」

自嘲気味に呟いてビールの残りを開

りに老けてはいるが面影が残っているからだ。ただしなかなか名前が出てこなかった。老化かもしれないと思った。新聞屋の細君の手料理で、ミニ同窓会は賑やかにほじまった。日本酒を買っておいでよかったと隆行は思った。

町役場に努めていた者。

地元の農協で働いていた奴。

出ていかなかった友達はみんなそういった仕事についていた。地元に残るにはそれしか仕事が無いともいえた。共通しているのは皆退職していることだった。三月生まれの隆行が最後だったわけだ。

「戻って来いよ」

無責任な発言が酔いにまかせて発せられる。

「そっしょうかな」

こちらも酔いに任せた無責任な返事だ。

最後は日本酒のコップ酒に変わり、したたかに酔って、腰も砕け、無論同席の面々が全てそうで、銘々が口々に勝手なことを言いあっていた。

「田舎もんを馬鹿にするな」

「まだまだ若い。まだやれる事があ

る」

「だまっておれの言うことを聞け」

喧しくなってきた所で、細君が車で送ってくれた。

気がついたら仏間に布団をひいて大の字で寝ていた。新聞屋の細君がひいてくれたらしい。煌々と灯った蛍光灯が眩しく、すでに頭が痛かった。

呑みすぎたらしい。これでは明日が面倒だ。そう思いながらまた眠りについた。

いた。

う。

守れた事はないが。

サラサラと流れる水を見てみると、少しかたなくではあったろうけれど、だった。

父も酒に酔ってよく、うずくまっていたものだった。あの人の場合は仕事柄しかたなくではあったろうけれど。

背中を丸めて耐えていた姿が浮かぶようだった。

そんな具合で半日を無駄にし、動きはじめたのは昼からだった。

家の周囲を見てまわった。痛んだところや堆積した泥やゴミを少しずつ片付けていった。体を動かして汗をかくとアルコールが薄まってゆくようで身体が軽くなるのがわかった。ついでに生い茂った雑草を取っていると後ろから声をかけられた。

「精がでるね」

昨日の老婆だった。また手押し車を

押して家の前までやってきていた。

「美味しくないかもしれないけれど、ちよつと作ってみたんで、食べてくれたらうれしいがやけど」

タッパーを二つわたされた。

手作りの惣菜と漬物らしい。

「これは、有り難い。いただきます」
本心から声が出た。買いに行くのも面倒だし、スーパーの惣菜は昨日食べたところだ。

「口にあうといいがやけど」

礼を言う隆行に手をふりながら、もそもそと引き返していく。それだけのためにやってきたらしかった。

「入れ物はいつでもいいから」

小さな背中に隆行はもう一度礼を言った。

相変わらず定子からは連絡がない。怒っているのかせいせいしているのかわからない。ただ自分からは電話しな

いでおこうと隆行は思っていた。

「おれは里帰りしているだけなのだから」

そんな言葉が浮かんでくる。やせ我慢のような気もするが。

自分で料理をしようとして、なくなった母が使っていた包丁がまったく切れないことに気づいた。誰も世話する者がなかったせいだろう。

昔は父がこまめに研いでいたものだった。

「急に切れるようになって、ビックリして手を切るなよ」

そう言って聞かせるのが癖だった。職人の砥いだ刃物は別物のように切れ味が良くなるらしい。台所の流しにしゃがんで一心に包丁を研いでいる父を見たことがあった。

たとえ家庭の包丁でも手を抜かずに仕事をする人だったと思う。

真似をしてまだ置いてある父の砥石

を使って砥いでみた。

父のようにはいかなかったが、切れ味はよくなったようだ。手を切るほどではなかったが。

翌日、隆行は物置に残っていた釣り道具を引っ張り出して海まで行き、魚を釣ってきた。田舎の海はすれていないのか、堤防から簡単に小魚が釣れた。拍子抜けするほどだった。

アジの小さいのと底物のなんという名前か、ゴツゴツして頭の大きなオコゼのようなのと、十匹あまりが小一時間で釣れてきた。

急に名人になったようでもいい気分だった。そのせいか不思議に捌くのが苦にならなかった。自分で砥いだ包丁で、自分で釣った魚を捌いて皿に盛る。知らぬまに鼻歌を歌っていた。

「定子や徹にも食べさせてやりたいな」

また独り言をいっていた。

六月の十一日がきた。

観音祭りの日だ。隆行は行って見るともりだった。あれからもう一度、祭りのチラシが新聞に挟まつてきた。

地図でみると昔と変わりない場所であるらしい。少し離れた駐車場に車を置いてブラブラ歩いていくつもりだった。

友達と一緒にとも考えたが、またそのあと酒になりそうで辞めておいた。ご馳走になりっぱなしでは、気がひけた。

隆行は朝から小学生のようにソワソワしていた。日が沈むのを待ちかねるといった有様だった。

六月の陽は長い。まだ明るさが残るうちに隆行は車に乗った。
四十年ぶりの祭りである。

商店街の外れに矢印が立っており、駐車場へと導いてくれた。

歩きはじめて隆行は以外に思った。

まず街並みが低く狭くて、子供の頃の印象と大きく異なっているのだ。自分が大人になったとはいえ、こんなにもみすばらしい建物ばかりだっただろうか。

空き家と、取り壊されて開きスペースになった敷地の多いことにも驚かされた。商店街といえるのはほんの少しではないかと、キョロキョロ首をめぐらせて歩くうちに、祭りの露天が並んでいる通りに出た。

まだ早い時刻とあつて人出は今ひとつだったが、子供の頃にワクワクして遊びに来たお祭りがそこにあつた。

日が少しずつ傾き夕暮れが辺りをおおいだすにつれて、露天の軒先につるされた電球の明るさが増し、祭りらしさが徐々に演出されていった。

隆行はことさらにゆっくりと惜しむように歩いた。

子供達が傍らをすり抜けるように駆けていき、その先の店先にかたまつていた。

隆行が子供たちの後ろから覗くと、テレビゲームのソフトであつたり、カードゲームの様々な札であつたりを並べていた。

要するに、一回いくらかで籤を引き、それらの商品をあてる露店であるらしい。子供たちに人気の品は変わつても、商売の本身は変わらない物らしい。

もうそのような遊びを卒業した子供しかいない隆行としては、馴染めぬ思いで眺めているしかなかった。息子の徹は去年大学を卒業して、隣の石油会社に就職していた。

全般に女子供の好きそうな飲食物の露店が多く、隆行はそのほとんどを眺めるだけで通り過ぎた。

不意に幼い頃の記憶が蘇えつてきた。

祭りの夜、日暮れてから帰ってきた父が隆行を自転車の後ろに乗せて連れて行ってくれたことがあった。それは一度ではなかったように思った。父は一人では祭りに行きにくかったのだろうか。

小学生の隆行の手を引いて歩く父の姿が蘇えってきた。

「品物に触るな。売りつけられるぞ」

「喋らずにだまって歩け。疲れる」

そんな注意ばかりされて結局何も買ってもらえなかった記憶ばかりが残っていた。

父はそれでも楽しかったのか、懲りずに隆行を誘ったものだ。

「俺も懲りずについていったな」

食堂で夕餉を取りながら、父のことを一緒に噛み締めるように思い出していた。

「何も買ってもらえなくても、一緒にいられるだけで嬉しかったのだ。あ

の頃は」

自分に確かめるように言うのと隆行はその頃の父の年齢をとうにこしている自分の年齢を思った。

「何か買って帰ろうか」

露店が途切れかけたところで、思案した。これではあの頃の父と変わらなideはないかと。かといって、八百屋に並んだ大きな房のままのバナナなど買うわけにも行かない。

一面に品物を並べている金物屋の露店があった。裸電球の光が浮かび上がらせた品物に見覚えがあった。あの頃も金物の露店に父は必ずたちよつたのだ。

家庭用の工具から大工道具など、雑多な品物を並べた店が父は好きだった。

背を丸めてしゃがみ込み長いこと、あれでもない、これでもない、手にとつて光に透かすようにして丹念に見

ていたものだった。

「俺は退屈しながらそれを後ろに立つて見ていたんだな」

隆行はさっぱり人のいない金物商の露店の前を離れられなかった。

今も目の前に、あの頃の父の丸まった背中が見えるような気がした。

どう見ても安物中心の露店の品物なのに、父は執念を感じるほどに時間をかけて眺め、調べ、吟味して、いつも何かしら買っていたものだった。鉋や墨壺など大工道具が多かった。

「露店の道具を仕事に使ったのだろうか？」

亡くなった父に出来ることなら聞いて見たかった。

目じりに皺を寄せて、「なかには出物も混じっていたんだ。目利きが出来ないは無理だがな」

そう呟く父がいそうだった。

隆行は家庭用の包丁のセットを求め

て帰る事にした。

「きつとこれは出物などではない、安物の外れなんだろうけれど」

父が生きていたら、目聞きのなさに顔をしかめられるような気がした。

不意に定子の声が聞きたくなくなった。家を出てきてもう一週間で過ぎていた。

「あいつも俺以上に頑固だ」

携帯を開きながら苦笑が浮かんできた。

数回のコールであっけなく定子が出てきた。

「どうしたの、もう帰りたくなっただ？」

どこかからかうような口調である。

「そうじゃないんだが……」

「あら、まだ飽きないの？」

「そういうことかな。なあ明日こつちへ来ないか？」

自分でも意外な言葉がするりと出て

きた。少し前まで考えてもいないことだった。 がしていた。

「どうして、何かあったの？」

定子は不審そうに聞いてきた。

「お祭りをやっているんだ、こつちで。お前にもみせてやりたいと思つて。俺が子供のころ、楽しみにしていた祭りなんだ。来ないかこつちに」

すこし沈黙があった。

「いいわよ」

あっけないほどの答えだった。

「電車でいい？あたしそこまで車ではいけないから」

「迎えに行く。俺が釣った魚も食わしてやるから」

遠くから定子の苦笑が聞こえてきた。

「楽しみにしているわ」

隆行は電話を切った後も一人でニヤニヤとして歩いた。

どこかで父が見守っているような気